

茶筴状竹製品の系譜

岩倉城遺跡出土茶筴の位置づけ

● 木川 正夫

出土竹製品や竹製民具の中に、先端を細かく裂いて茶筴状を呈する物(茶筴状竹製品)がある。茶筴やササラのように名称がついていて用途が分かっているものもあるが、出土遺物の中には用途不明のものもある。この小論では岩倉城遺跡等の出土遺物を中心に微妙な形態の違いによって、茶筴状竹製品がどのような用途に使用されるか、また、似た用途でも歴史的にどのように形態が変化していくかを考察したい。

1. はじめに

筆者はさきに(木川1999)茶筴状竹製品について2例の出土例をあげて「スリザサラ」という楽器の片方の可能性があることを示唆した。他の出土例を再調査、再検討を加えた結果、用途の大部分(～類)は茶道具(茶筴)と考えて問題ないが、同じ茶筴状をしていても微妙な形態の違いによって用途が異なることが分かってきた。

茶筴のように用途が分かる物・用途不明の物を含めて“茶筴状竹製品”という名称が使用されている例があるので、本論でもこの名称を使用する。私が集成するにあたって基準にした“茶筴状竹製品”の定義は、

適当な長さ(数cm～数十cm)に切断された竹材の長軸に対して平行に割裂した竹製品(結果的に片方が束ねられた形状を呈す)

ということである。さて、そのような形状の遺物を可能な限り集めた。

集成を試みた結果、1999年末現在で日本のものが9遺跡10例以上は存在することが分かった(表1)。その内愛知県岩倉城遺跡出土例は、1遺跡からの出土数が2例と最多である。

今回の小論では、愛知県岩倉城遺跡出土の茶筴の持つ特徴が、戦国期の他の出土例と異なる点に重点を置いて考察した。

2. 従来の研究

この遺物については、研究と呼ばれるようなものはほとんどない。台所用具のササラ・楽器のササラ・茶筴と、三者それぞれについての研究であれば若干あるが出土遺物との関連はほとんど取り扱っていない。これらの研究は「5.用途」で触れる。三者を包括しさらに出土遺物を含めて研究されたものはない。ただ、増田修氏と横山妙子氏の集成された目録(増田・横山1997.11)の鋸歯状木製品の項に数例(生立ヶ里例・袴狭例)の報告書名等が紹介されている。

3. 出土例の観察

出土例10例を報告書・発掘担当者の話・筆者が実物を見て等の手段で観察した結果の概略を以下に記す。

1 宮内堀脇例¹

筴竹を束ねたような形状。武家屋敷内区画溝出土。

2 青山学院例(青学構内調査会1994)

ささら 觥?と報告されている。木片を一方で束ねたような形状。何で束ねられていたかは不明だがその痕跡がある。木製だが参考例として加えた。伊予西条藩上屋敷出土。

3 生立ヶ里例(牛津町教委1995)

1 未報告資料。

節は下端から3.5cmのところにある。穂はまず節の5mm上方から16分割の大割りとなされ、さらに3cm上方で(出土時は桜皮がこの付近に集中して巻かれていた。)それぞれを3分割し、さらに2cm上方で先端がきめ細かく裂かれている。大割りの部分は身が残っている。それより先端は身が削がれている。鋸歯状木製品と30m離れて出土。SE94中の木臼と伴出。

4 紀尾井町例 (紀尾井町調査会 1988)

茶筌の先端が破損して(切れて)ほどけたもの?と報告されている。SR35出土。

5 一乗谷例 (朝倉資料館 1983)

比較的残存状態はよいが、ややひしゃげている。穂先はのびており、内傾していない。出土茶筌としては最古の形態とされる。町屋SB2530出土。

6 梅原胡摩堂例 (富山県埋文セ 1996)

穂先の末端は内に曲げられており、節が抜かれて(貫通して)いる。比較的口径の大きい竹材を使用。穂数約105本。井戸SE9751出土。

7 袴狭例 (兵庫県埋文セ 1996)

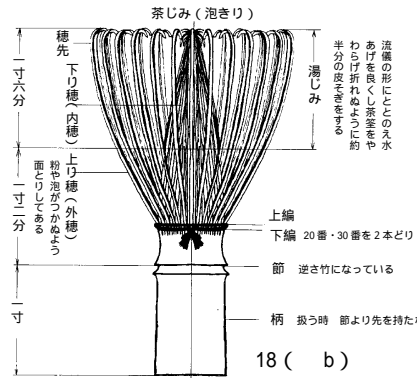
穂の根元付近に編み糸の痕跡がある。しかし穂同士に凹凸がないので上り穂(外穂)・下り穂(内穂)の区別はない。また、先端部は変色しており、大割り以前に表皮をむいた痕跡と思われる。穂先はのびており、内傾しない。穂数74本。三間堂雨落ち溝出土。

8 宮内例²

穂先が欠損。それ以外は袴狭例に類似。武家屋敷付近出土。

9・10 岩倉城例 (愛知県埋文セ 1992)

いずれもひしゃげた状態で出土。穂先が何れも欠損しているが、出土時は残っていた。残存する穂先の内傾は認められない。穂の付け根に凹凸があることから外穂・内穂の区別があったようである。しかし、編み糸の痕跡は見あたらない。いずれも本丸内区画溝SD03出土。



編糸(結び目)
芽のあるものは芽のある方に結び目
芽の見えぬときは竹を抜いなれると出る筈
の所がわかるが)その裏側になっている

図1 茶筌の名所(内山1974より引用)

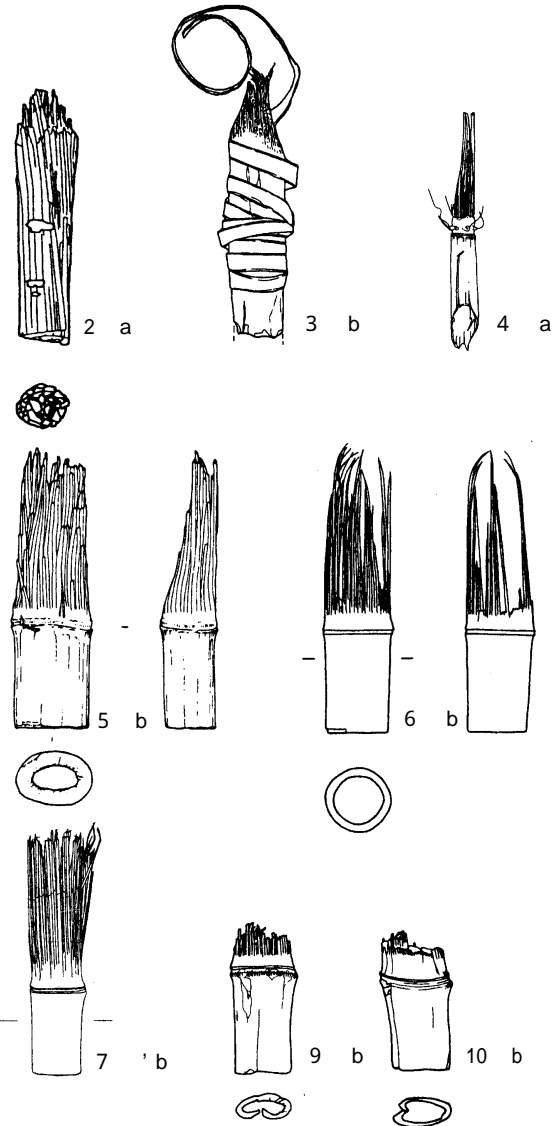


図2 出土茶筌状竹製品集成図(1:4)

番号は表1に対応・図は各文献より転載

表1 茶筌状竹製品地名表

No.	遺跡名	分類	材質	全長	幅厚	割裂範囲	握り部長	年代	所在地
1	宮内堀脇遺跡	Ia	竹					16世紀後半	兵庫県出石郡出石町宮内字堀脇
2	青山学院横内遺跡	Ia	木	10.5	3.9	10.5	6.6	江戸	東京都渋谷区渋谷4丁目4番24号
3	生立ヶ里遺跡	IIb	竹、桜皮	14.3+α	2.5×2.5	10.3+α	4	弥生中期前半(BC1C)	佐賀県小城市津町大字乙種
4	紀尾井町遺跡	IIIa	竹	12.3	1.3	5.5	6.8	1620~1669	東京都千代田区紀尾井町3-3
5	一乗谷朝倉氏遺跡	IIIb	竹	11.2	3.2×2.2	6.4	4.8	戦国(1471~1573)	福井県福井市城戸ノ内町字赤淵
6	梅原胡摩堂遺跡	IIIb	竹	15.2	3.4×3.4	8.8	6	中世後期(16C)	富山県西礪波郡福光町橋原・宗守
7	袴狭遺跡	IIIb	竹	14.3	3.0×3.0	8.3	6	16世紀後半	兵庫県出石郡出石町袴狭
8	宮内遺跡	IIIb	竹					16世紀後半	兵庫県出石郡出石町宮内
9	岩倉城遺跡	IVb	竹	8.0+α	3.2×1.4	1.8+α	6.2	戦国(1479~1559)	愛知県岩倉市下本町
10	岩倉城遺跡	IVb	竹	7.2+α	3.8×1.6	1.2+α	6	戦国(1479~1559)	愛知県岩倉市下本町

2 未報告資料。

4. 型式分類と年代比定

9遺跡10例について、表1(寸法の単位はcm)のように型式分類と年代比定を試みた。その基準を表3に示した。a類(握りは手で握る長さ)とb類(握りは指先でつまむ長さ)との長さの境界はおおよそ6.2cmを基準として、a類がそれ以上、b類がそれ以下の長さである。また、実測図等を図2に示した³⁾。補足のために民俗例や絵画資料(筒井1992・林屋1980)等を加味し、資料対象を増やして考察した。海外の例を中国に限定した理由は、中国の文献や絵画資料に茶筴やササラに類する楽器等の掲載があり、日本への影響が最も強いと考えられるからである。

5. 用途

茶筴状竹製品の用途は主に次の三つである。

- (1) 台所用具(タワシ).....
- (2) 楽器(ササラ)..... a
- (3) 茶道具(茶筴).....

次に各用途別に形態の歴史的变化を追っていき、出土例がどれに相当するか等検討を加えたいと思う⁴⁾。

(1) 台所用具(タワシ)として

台所用具のササラ・束子の歴史については小泉和子氏の著作(小泉1994)等が詳しいと思われる。

類の台所用具のササラの由来はさだかでない。江戸時代の文献『南都名産物集』に「団扇。竹は筴帚(ささら)のごとし」とあるので、江戸時代に竹を細かく割った物を清掃道具等に使用していたであろうと想像がつく。江戸末期以降の「勝手道具尽し」(図3-1)に登場しているのでその頃は随分普及していたと思われる。出土例として、宮内堀脇例・青山学院例がある。また、中華料理の鍋を洗うのに、中国でも日本でも現在に至るまで用いられている。束子で洗うより泡切れがよいらしい。現在製作されているも

のを観察すると、中国の物も日本の物も握り部にまず角材の芯を用意し、厚めの竹を細かく割いて皮つきと皮なしに分け、皮なしの方でまず芯を包み込むように束ね、皮つきの方で皮の部分が外周を向くようにその外側に束ねて、針金または繊維の紐で握り部を縛る。形状の似たものが洋服ブラシ(図3-3)としても使用されている。

江戸期の絵画資料には唐の陸羽の『茶経』(760年)に記述のある「札」の推定図がいくつか描かれている。「札」は竹を細かく裂いて束ね、茶器を払い清める道具として記述されているのだが、『茶経中巻茶器図解』(18世紀末)には「竹札」(図3-2)として柄の長い筆状のもの、『茶筴之一件』(江戸後期)には「唐茶筴(図3-4)」としてあたかも茶筴の起源であるかのように描かれている。

類の一部は台所用具(図3-17)として使用されるが、楽器として使用される物との違いは、穂が面取りや間引きされずに密な状態にされていることである。そのような形状でないとタワシのような役目は果たせない。

束子(たばし・たはし・たわし)はもともとは自家製で、江戸時代以降都市で商品化され、棕櫚製のものが江戸時代の遺跡から何十点と出土している。

(2) 楽器(ササラ)として

楽器としてのササラ(日本にササラと名のつく楽器が二種あり、一つはスリザサラ、もう一つはピンザサラである。この場合はスリザサラ。)の歴史については、拙論(木川1990)があるが、山路興造(山路1988)や増田修(増田1997)のものが詳しい。

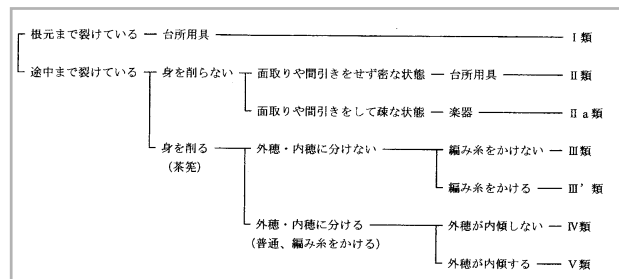


表2 茶筴状竹製品の用途推定表

3 図中の各数字は表1の遺物番号に対応

4 本文中の「図1-」などの数字は図1・図3と対応させてある。

刻骨や鋸歯状木製品がスリザサラの左手で持ち擦られる方である可能性があり、日本では弥生期までさかのぼれるが、右手で持つ擦る方(ササラ竹)の出土例がないため、瓜郷例の刻骨のように棒状の鹿角や木の棒で擦られていた可能性がある。このような例は世界の民族楽器等にも見られる。擦る方が竹製の茶筌状になるのは、日本では文献や絵画資料上平安末期からと考えられる。中国では「^{ぎよ}敵」(図3 - 16)という孔子廟聖楽用の楽器が春秋時代から存在し日本のスリザサラ(図3 - 15)の原形かとも考えられるが、宋の陳暘の『楽書』によると、初めは擦る方は木の棒であり、竹製になったのは唐代以降らしい。

類の一部(a類のように握れるタイプ)の茶筌状竹製品の用途としては、スリザサラのササラ竹が考えられる。a類でも台所用具に使用される物との違いは、面取りや間引きをして疎にされていることだ。そのようにしないとササラゴを擦る時うまく音が出ない。これらに似た出土例として生立ヶ里例がある。しかし用途不明である。いくつかの説は出されているが、水野正好や山崎和文(佐賀新聞1995)は楽器説をとっている。その根拠としては、生立ヶ里例の茶筌状竹製品が鋸歯状木製品(ササラゴと考えられるもの)と約30m離れた同時期の遺構で出土していることである。筆者(木川)も両者の実物を観察したが、穂先が細かく裂かれていることや鋸歯状木製品の刻目が浅く短くしか刻まれていることから、両者を結びつけることは少々困難と言わざるをえない。むしろ、木臼と伴出したことからタワシのように使用されたか、液状のものを攪拌するために使用したのではないかと考えたい。

(3) 茶道具(茶筌)として

茶筌の歴史については、内山一元の著(内山1974)をはじめ、熊倉功夫(熊倉1977)、布目潮瀨(布目1998)等が詳しい。また、現存民俗例からは漆間元三(漆間1982)や中村羊一郎(中村1992)が詳しい。

文献上茶筌が登場するのは北宋徽宗皇帝の『大觀茶論』(1107年)である。抹茶を攪拌し、泡立てるための道具として唐代の竹夾(ちくきょう=竹ばし)、北宋の茶匙(ちゃさじ)にかわっ

て使用され始めた。南宋の『茶具図贊』(1269年)には「竺副帥」として茶筌の絵が載せてある。他に南宋代の『品茶図』(12~13世紀)や元代の『元宝山墓壁画』(14世紀)などに描かれているが、15世紀、明代に中国では抹茶の衰退とともに茶筌も消滅してしまう。日本で文献上の初見は鎌倉時代(13世紀末)で、絵画としては南北朝時代の『慕帰絵』(1351年)である。『福富草紙』(15世紀前半)のものも初期のものとして有名である。日本ではこの後、形態の変化・多様化は見られるものの、現代まで連綿と製作・使用されている。さて、茶筌状竹製品の内、茶筌に相当するから類の分類であるがこれは筆者が文献・絵画資料・伝統工芸品とその製作方法などから分類したものであり、おおよそから順に多様化していくものとおもわれる。

類

現在の民俗例で残っている振り茶や桶茶に使用する茶筌と同様の形態である。類以下との決定的違いは外穂・内穂に分けない点である。その分製作に手間がかからない。また類との違いは竹の身を削ることで、その製作過程で穂先は内傾することがある。初期の絵画資料として『茶具図贊』(図3 - 7)、『慕帰絵』(図3 - 8)、『福富草紙』(図3 - 12)が相当する。民俗例の振り茶用茶筌として出雲のポテポテ茶筌(図3 - 11)、桶茶用茶筌として沖縄のブクブク茶筌などがある。なおブクブク茶筌を描いたと考えられる古いものに『中山伝信録』(1721年)の「小竹筌」の図(図3 - 6)がある。出土例としては、一乗谷例・梅原胡摩堂例が相当する。

また、類として編み糸のかけられているものをここに入れた。この編み糸は類のように外穂・内穂に分けるためのものでなく、穂同士の間隙を開けるためのものである。初期の絵画資料として『品茶図』(図3 - 9)、『元宝山墓壁画』(図3 - 13)などが相当する。民俗例として北設楽郡の桶茶用茶筌(図3 - 10)・中曾司の茶筌(図3 - 14)がある。出土例は袴狭例・宮内例が相当する。

図3 各種の茶筴状竹製品 (約1:4)

各文献より転載

(1,8,12,13,16は再トレース)

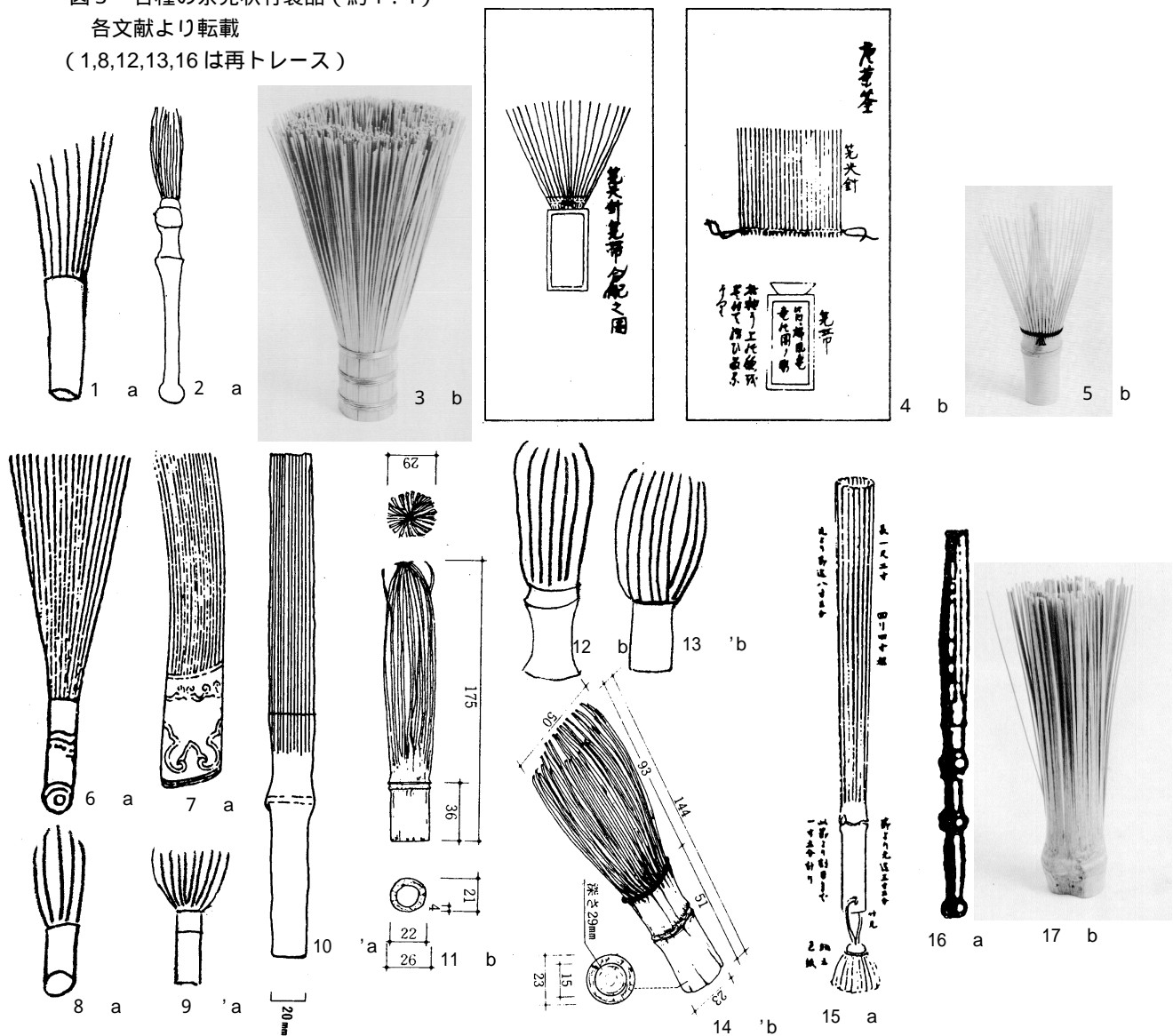


表3 茶筴状竹製品型式分類表

型式	特徴	年代	用途	出土例・絵画例・民俗例等	国別		
I類	竹を縦に割り片方を束ねる	16世紀後半～現代	食器洗浄用・はけ		日本		
		唐～現代	食器洗浄用・はけ		中国		
		I a類	握りは手で握る長さ	16世紀後半～現代	食器洗浄用	宮内堀脇例・(青山学院例)・勝手道具つくし	日本
			唐～現代	食器洗浄用	茶経の「(竹)札」・中華鍋用ササラ	中国	
I b類	握りは指先でつまむ長さ	近代～現代	はけ等	洋服ブラシ用	日本		
		唐～現代	はけ等	(唐茶筴)・中華鍋用ササラ	中国		
II類	竹を縦に途中で割り裂く	弥生中期～現代	主に楽器ササラ		日本		
		唐～現代	孔子廟聖楽用		中国		
		II a類	握りは手で握る長さ	平安～現代	楽器ササラ	民俗芸能例	日本
			唐～現代	孔子廟聖楽用	「ぎょ」のささら竹	中国	
II b類	握りは指先でつまむ長さ	弥生中期～現代	食器洗浄用	生立ヶ里例	日本		
					中国		
III類	II類の筴部の身を削る	12世紀末～現代	初期の茶筴		日本		
		12世紀～15世紀	中国の茶筴		中国		
		III a類	握りは手で握る長さ	12世紀末～現代	初期の長茶筴	紀尾井町例・中山伝信録・桶茶用茶筴	日本
			12世紀～15世紀	宋代の茶筴	茶具図贊・品茶図(III'a)	中国	
III b類	握りは指先でつまむ長さ	14世紀～現代	初期の短茶筴	慕婦絵・福富草紙・一乗谷例・梅原胡摩堂例・振茶用茶筴・袴狭例(III'b)・宮内例(III'b)	日本		
			元～15世紀	元代の茶筴	元墓壁画(III'b)	中国	
IV類	III類の筴部を内外に分ける	15世紀中葉～現代	初期茶道用茶筴				
		IV a類	握りは手で握る長さ	江戸時代～現代	初期天目茶筴	宗守流天目茶筴・空也堂大茶筴	
			握りは指先でつまむ長さ	15世紀中葉～現代	初期茶道用茶筴	高山宗砌の茶筴・岩倉城例・利休茶筴・宗守流	
		IV b類	握りは指先でつまむ長さ	17世紀～現代	茶道用標準茶筴		
握りは手で握る長さ	江戸時代～現代				天目茶筴	表千家流天目茶筴・西大寺大茶筴	
V類	握りは指先でつまむ長さ	17世紀～現代	茶道用標準茶筴	裏千家流数徳			

類

戦国時代初め頃、村田珠光のすすめで高山宗砌が開発したと考えられるタイプの茶筌。外穂・内穂に分けることによって、茶の湯に使用される茶筌も芸術の域に高められた。千利休もこのタイプ(図3-5)を用いた。ただし編み糸をかけていないと何度も使用する内に外穂・内穂が寄ってくる。しかし、穂の付け根の凹凸は残る。出土例としては、岩倉城例が相当する。

類

千利休以降に出現したとおもわれる、上り穂(外穂)の先端を内に曲げるタイプ。裏千家流等(図1)で利休の形状を真似るのがおそれ多いとこのことで先端を曲げたことが始まりらしい。ただし、何度も使用するうちに外穂の先がのびてくる。現在、裏千家流数穂というこのタイプが標準茶筌として(流派にこだわらないときなど)使用される。

6. 岩倉城遺跡出土例の位置づけ

岩倉城例を観察してみて、他の戦国期の出土茶筌と比較して異なる点は穂の付け根に凹凸が

参考文献

- | | | |
|-----------------|---------|--|
| (財)愛知県埋蔵文化財センター | 1992.3 | 『岩倉城遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』38 |
| 青山学院構内遺跡調査調査室 | 1994.3 | 『青山学院構内遺跡(青学会館増改築地点)伊予西条藩上屋敷跡の調査』青山学院構内遺跡調査委員会 |
| 内山一元 | 1974.12 | 『茶筌博物誌』東京書房社 |
| 漆間元三 | 1982.4 | 『振茶の習俗』『民俗資料選集』12国土地理協会 |
| 木川正夫 | 1990.5 | 「刻目のある木製品について ササラの起源と変遷」『民具研究』87 |
| 木川正夫 | 1999.3 | 「刻骨と鋸歯状木製品に関する比較考察」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報 平成10年度』 |
| 熊倉功夫 | 1977.10 | 『茶の湯』歴史新書 日本史 81 ニュートンプレス |
| 黒沢隆朝 | 1984 | 『図解世界楽器大事典』雄山閣 |
| 小泉和子 | 1994.9 | 『台所道具いまむかし』平凡社 |
| 佐賀県牛津町教育委員会 | 1995 | 『生立ヶ里遺跡出土木製品図録編』『牛津町文化財調査報告書第7集』 |
| 佐賀新聞 | 1995.1 | 「木・竹製は『ササラ』 国内最古の楽器か」1月17日 |
| 千代田区紀尾井町遺跡調査会 | 1988.11 | 『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』 |
| 筒井紘一監修 | 1992.4 | 『茶の湯絵画資料集成』平凡社 |
| (財)富山県文化振興財団 | 1996.3 | 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』(富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告7) |
| 中村羊一郎 | 1992.3 | 『茶の民俗学』名著出版 |
| 布目潮風 | 1998.4 | 『中国茶文化と日本』汲古選書21 汲古書院 |
| 林屋辰三郎著・村井康彦図版解説 | 1980 | 『図録茶道史』淡交社 |
| 兵庫県教育委員会 | 1996.8 | 『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』22 |
| 福井県立朝倉氏遺跡資料館 | 1983.3 | 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 昭和57年度発掘調査整備事業概報』 |
| 増田修・横山妙子 | 1997.11 | 「『ささら』に関する参考文献目録」『古代の風』41 別冊付録 市民の古代研究会 |
| 増田修 | 1997.11 | 「解説『ささら』に関する参考文献目録」『古代の風』41 別冊付録 市民の古代研究会 |
| 松下智 | 1990 | 「三・信・遠の製茶・喫茶用具について」『山村民俗の物質文化的研究』 |
| 山路興造 | 1988.3 | 「『ささら』とささら説経」『京都部落史研究所紀要』8 |

見られることである。これは外穂・内穂に分けられていたことを意味する。外穂・内穂に区別するとき編み糸をふつうかけるが、その痕跡は見られない。現存状況として穂先が根元からことごとく折れていることから、編み糸がかかっていた可能性はある。それらのことから、高山宗砌が開発したとされる芸術的な茶筌の最古の出土例ではないかと考えられる。

7. 結 び

茶筌状竹製品に関して、さまざまな分野の文献に目を通し、以上のような見解を持つに至った。まだまだ不明な点多々あるが、茶筌状竹製品の出土例が増えていき、茶筌状竹製品の系譜がさらに解明されていくことを期待する。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、兵庫県の西口圭介氏に未発表資料のデータの提供をいただきました。また佐賀県の大橋隆司氏・福井県の南洋一郎氏に出土遺物等について御教示いただきました。一部の図版の掲載に関しては、群馬県の内山一元氏に御快諾をいただきました。ここに謹んで感謝いたします。